

氏名	丹羽 菜月
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第16号
学位授与年月日	令和6年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
題目	学位論文題目 日本伝統音楽におけるヘテロフォニーの形態 －木遣りの事例研究を通して－
学位論文等 審査委員	(演奏審査) 主査教授 成 本 理 香 副査教授 小 林 聡 副査教授 山 本 裕 之 (論文審査 及び最終 試験) 主査教授 成 本 理 香 副査教授 小 林 聡 副査教授 東 谷 護 外部 審査員 特任教授 久 留 智 之(名古屋音楽大学)
学位論文の要旨	
<p>本研究は、日本の伝統芸能である木遣りに焦点を当て、不均質な声の集合体が生み出す音楽形態を手がかりに、日本伝統音楽におけるヘテロフォニーについて考察したものである。</p> <p>日本伝統音楽の多くは、音高、音価、音色、音勢に「ゆらぎ」を含む不均質な楽音を用いて全体が構成されている。すなわち「時間的な『ずれ』を伴う異質な音楽構成要素の集合体」であるといえる。西洋芸術音楽以外の音楽文化では、このような不均質な楽音が前提となっており、そこに含まれる音楽の実態は極めて多様性に富んでいる。しかしながら、これらを西洋芸術音楽の語法における「ヘテロフォニー」という用語で一括りにし、「ホモフォニー」や「ポリフォニー」のどちらにも当てはまらない他文化の音楽形態の総称として用いられている場面を度々目にする。このように日本とは異なる音楽文化をもつ他国の音楽の用語で、日本伝統音楽を語り尽くすことができるのだろうか。</p> <p>日本伝統音楽におけるヘテロフォニーのこれまでの研究に目を向けると、ヘテロフォニーの「異質性」に着目することはあっても、それらを詳細に論じたものは少ない。また日本伝統音楽における「ずれ」の現象については、主に音高の関係性について考察されているものが多く、音価、音色、音勢等の情報はあまり重視されていない。</p> <p>本研究はこのような実態を把握した上で、日本伝統音楽を「時間的な『ずれ』を伴う異質な音楽構成要素の集合体」と捉え、日本伝統音楽におけるヘテロフォニーの形態を考究することを目的とする。そうした視座から日本伝統音楽のあり方を考察するなかで、特に日本の伝統芸能の一つである木遣りに着目する。木遣りは元来、仕事唄としての役割を担っていたが、現在では芸能として全国各地に存在し、数人から数百人の規模で唄われる。</p>	

また人の声は一度発した音を引き延ばしつつ、音高や音量の変化から倍音構造の変化に及ぶ響きの変容を導くことができるという点において、日本伝統音楽における不均質な楽音の性質を反映したものであるといえる。木遣りを考察するに際し、本研究では、愛知県名古屋市天白区に現存する平針木遣り音頭保存会が継承する「平針木遣り」の稽古体験を通じた現地調査を行なった。本研究はその際の指南役による指導内容、唄い手達への聞き取り調査の内容、筆者による稽古時の収録音源の採譜等の資料に基づいている。その上で、考察の対象を「伊勢木遣り」「諏訪木遣り」「江戸木遣り」まで広げ、実演記録の採譜を基にした分析を通して、地域ごとにおける木遣りの形態や技法等の比較を行なった。

本論文は3章から構成される。

第1章では、日本伝統音楽におけるヘテロフォニーを考察するにあたり、合奏における「合う」状態の意味について論じた。第1節では、ヘテロフォニーにおける現行の定義を確認し、ヘテロフォニーが西洋芸術音楽において同質なものの集合体として捉えられていること、そうした価値観が西洋芸術音楽の楽音の性質に起因することを指摘した。第2節では、日本伝統音楽における不均質な楽音を用いた合奏の形態について、音楽学者、および日本伝統音楽や非西洋音楽に着目した作曲家による言説を基に考察した。不均質な楽音における音の内部の「ゆらぎ」が全体に与える影響について述べ、楽音の性質と音楽構造すなわち「個」と「全体」が相互に関連し合うことで一つの有機体を作り出すという日本伝統音楽の表現のあり方を探った。第3節では、旋律の共有を前提とする現行の定義から逸脱した音楽形態を包含するよう、日本伝統音楽におけるヘテロフォニーを「旋律のヘテロフォニー」と「時間のヘテロフォニー」に分類し、より広い視野でヘテロフォニーを捉えた。さらに、それぞれについて実際の音楽を例に挙げながら、音の合わせ方や合わせた時に生じる効果について考察した。第4節では、日本伝統音楽におけるヘテロフォニーの音楽の形態を「継時的なずれ」と「同時的なずれ」の二つの視点から捉え、日本伝統音楽に内包する音楽的時間や音の特性について述べた。その後、これまでの考察を踏まえ、日本伝統音楽の合奏において「合う」という言葉が、緻密な掛け合いのなかで全員呼吸が合った際に発現する音楽的な効果を指し、それによってその場の空気を締める、いわゆる「場を締める」作用があると考えた。

第2章では、本研究の考察対象である木遣りに関して、その起源から現在までを論じた。第1節では、木遣りの概要についてまとめた後、木遣りに関する先行研究をたどり、合奏の形態について音楽的な側面から十分な考察がなされているとは言い難いこと、現時点での先行研究が長野県内の木遣りに集中していることを指摘した。第2節では、本来の仕事唄としての役割から現在の芸能としての役割に至った木遣りにおける変化の過程を追った。第3節では、木遣りを種別ごとに並べ、それぞれの作業内容や唄としての役割について述べた。第4節では、元来、男性のみで唄われてきた木遣りが、様々な世代や性別が混在する現在の形に推移した背景に、深刻な後継者不足の問題が潜んでいること、それによって木遣りが「原型」から少しずつ離れていることを指摘した。第5節では、考察の対象を「伊勢木遣り」「平針木遣り」「諏訪木遣り」「江戸木遣り」の四つに絞り、各木遣りとそれらを継承する各木遣り保存会について概要を述べた。

第3章は、木遣りのヘテロフォニーをめぐる具体的な事例研究である。第1節では、

日本の音楽学者、および日本伝統音楽や非西洋音楽に着目した作曲家が木遣りにおけるヘテロフォニーをどのように捉えていたのかという点について様々な言説を基に考察した。そのなかで「声の密度」の形成と木遣りのヘテロフォニーとの関連性について取り上げ、後に続く分析の糸口とした。第 2 節は、木遣りの稽古体験を通じた筆者による現地調査を基に、平針木遣り音頭保存会における稽古の流れや練習法についてまとめ、口頭伝承における節回し習得までの過程を追った。その結果、平針木遣りの節回しの伝承においては、歴代の複数の名人達の節回しを模倣し、それらを自由に組み合わせることで自分のオリジナルの節を作っていく「イミテーションの複合型」ともいえる手法がとられていること、また現在ではその手段として CD というテクノロジーを用いていることを指摘し、「師資相承」の新たなあり方を明らかにした。第 3 節では、筆者による四つの木遣りの採譜資料を基に、「継時的なずれ」と「同時的なずれ」の視点から分析を行ない、木遣りにおける「ずれ」の形態や合奏法について述べ、先行研究では明らかになっていなかった木遣りの具体的な音の合わせ方について論じた。分析を通して浮かび上がった木遣りのヘテロフォニーを形成する重要な要素として、「非定常的な持続音」「音高がわずかに『ずれ』たものの重なり」「多様な声の集積」の三つを挙げた。

最後に、現代の情報学における先行研究を援用し、不均質な声の集合体が生み出す音楽の形態についてさらなる考察を行なった。まず、木遣りの声の性質について論じ、地声によるノンヴィブラートの発声を基本とする木遣りでは、持続音の質自体が高密度である点を明らかにした。次に木遣りのヘテロフォニーを形成する三つの要素に類似した条件をもつ音楽の最大エンロトピースペクトルアレイを手がかりに、人間の知覚領域を超えた音情報について言及した。提示したすべての解析例が、楽譜にはあらかた見えないミクロな時間領域における音の「ゆらぎ」や高周波を含み、それらが重層化することでさらに「ゆらぎ」を増強していた。したがってこうした要素の複合体である木遣りにも同様の効果が期待され、これにより個々の不均質な声と全体の相関性が明らかになった。同時にそれらが、声の密度の形成において重要な役割を果たしていることを示した。以上の研究成果を踏まえて、現行の定義を逸脱する様々な音楽文化における多様な音楽形態を包含しうるヘテロフォニーの新たな定義を提示すると共に、本研究におけるさらなる展望を示し、論を結んだ。

本研究は、日本の伝統音楽における不均質な楽音をまとめ上げる上での多様な方法論が、他国の音楽と共に西洋芸術音楽におけるヘテロフォニーという用語で一括りにされていることへの疑問を有したことが起点となった。同時に日本伝統音楽から西洋芸術音楽を捉え直すという視点を併せもつ試みであったともいえる。加えて木遣りにおける「ずれ」を単なる現象としてみるのではなく、現地調査を通じて、「唄い手＝情報を発信する側」に視点を移し、「どう聴こえるか」ではなく、「どう発するか」という視点で捉えたことで、より本質に近い部分で日本のヘテロフォニーの形態を見だし、示したのである。

演奏審査結果の要旨

本学位申請リサイタルは、このリサイタルのために作曲された新作を含む近作 7 曲が演奏された。リサイタルは、始めに研究内容について解説があり、その後曲間にそれぞれの作品について解説を挟む形で進められた。最初の解説は「木遣り」を通じて「ヘテロフォニー」を新たに定義するという論文の内容について簡潔にまとめられて、わかりやすく語

られたこと自体が深い理解と考察のもと論文を完成させたことを思わせた。

研究内容との接点をもった作品のプログラミングで、コンサート前半には「揺らぎを持った不均質な楽音をいかにして作り出すのか」という点について焦点を当てた作品が3曲、後半は「そのような素材をどう活かして、どう合奏するのか」という点について試みた新作を含む作品が4曲演奏された。どの作品も完成度の高いもので、途中のトークもわかりやすく、コンサートとして充実度の高いものであった。審査員からも、総じて水準の高い作品であったとの意見が出され、近年の申請者の創作における充実ぶりが発揮されたコンサートであったといえる。

一方で、申請者が注目する「どう合奏するのか」ということについて、縦方向の音に対して必然性を感じられないことが稀にあるという意見もあった。また横方向の音の選び方については、もっと別の音の選び方があるのではないかという意見と、今の選び方が申請者自身の音楽の特徴ともいえるものであるという相反する意見もあった。

全体的に音が多く、クラスターやそれに準じた音が多用されており、それが申請者の音楽の彩と特徴の一つともなっている。一方で、内部構造のない音響ともいえるクラスターの多用は変化に富むと言い難い面もあり、クラスターの多用から抜け出した時に申請者がどのような音響を作っていくのか、今後の楽しみである。

ここにあげたいくらかの指摘は、全体の作品群の充実ぶりを低めるものではなく、総じて非常に「書く力」のある作曲家であるということには間違い無いということで審査員の意見は一致していた。

なお、この日演奏された作品の中で一番古いものは2015年に作曲された《アンドロイド・カンタービレ》である。この作品は申請者がまだヘテロフォニーや木遣りなどに関心を持つ前のものではあるが、非西洋芸術音楽における音高や音色、音勢が大きく揺れ動く楽音というような要素を、意識的に曲の一部に取りこんだ作品で、現在の創作活動の原点ともいえる作品であった。そのため、ここを出発点にして最新作まで、申請者の「不均質な楽音」に対する関心がどのように移り変わってきたのかがよく理解でき、最終的には大学院博士後期課程でのヘテロフォニーに関する研究が最新作の《「鳴き」の合わせ方》で見事に結実していた。

以上のような議論を経て、全員一致で「合」と判定する。

論文審査結果の要旨

本学位申請論文は、日本伝統音楽の音楽的特色を「時間的な『ずれ』を伴う異質な音楽構成要素の集合体」と捉え、日本伝統音楽におけるヘテロフォニーの形態を、木遣りの事例研究を通して、明らかにしようとするものである。日本の伝統音楽にみられる「ずれ」の現象を、西洋音楽の語法であるヘテロフォニーの概念で捉えることへの疑問が本論文の出発点となっている。

第1章では、日本伝統音楽におけるヘテロフォニーに関する様々な言説と事例の検討を行う。具体的には日本の合奏形態について考察し、旋律のヘテロフォニーと時間のヘテロフォニーに注目する。これらの考察が日本の伝統音楽におけるヘテロフォニーに「継時的なずれ」と「同時的なずれ」という特質を見出す。

第2章では、第1章で考察したヘテロフォニーの特質の分析対象を木遣りに絞る。まず、

木遣りの概要を確認し、続けて分析対象とする「伊勢木遣り」「平針木遣り」「諏訪木遣り」「江戸木遣り」の4つの木遣りについての概要と実態が述べられる。

第3章では、木遣りの分析をもとにしたヘテロフォニーについて考究する。解析方法としては、既存の音源や録音・録画媒体の分析に加え、木遣り保存会に出向き申請者自身が保存会の一生徒として指導を受け、稽古体験を通じた現地調査を行うものである。

結論では、ヘテロフォニーを「狭義のヘテロフォニー」と「広義のヘテロフォニー」の2種類に分類し、様々な音楽文化におけるヘテロフォニーの形態を包含できると結論づける。

本学位申請論文では、申請者が実際の現場にも足を運び、見学だけでなく申請者自身も稽古体験することにより演奏者側の感覚や視点も得ていることが論考にさらなる説得力を与えている。申請者により採譜された資料が多くあげられているが、微妙な音程とリズムのずれを伴う木遣りの採譜は、申請者が高度なソルフェージュ能力を持っていたからこそできたとも言える。加えて、周波数解析ソフトの使用、方眼紙を使用した音高やタイミングの密度差の分析、日本民謡などで用いられている音勢表記など様々な分析方法を用いて「木遣りの声の密度の容態」を炙り出すことに成功している。また、結論を提示した後に、本研究を日本の伝統音楽を西洋音楽的な立ち位置から分析する限界にも言及している点も申請者の冷静な分析があつてこそ導き出された言葉であり説得力を持つ。

このように本論文は着目したテーマはもちろんのこと、方法、論の進め方においても堅実である点において、高く評価できる。

しかしながら、言説への解釈がやや甘い点が見受けられたこと、今回用いられた音響解析ソフトはあまり精度が高くないため超高周波の情報まではアプローチできていないこと、結論部分でヘテロフォニーにとどまらない論述に論理の飛躍が見られることなど、より高い完成度を目指す余地があることも否めない。木遣りの最大の特徴である「声」について、申請者自身が現場で感じ取った感覚や手触り感的なものを言及するまで至らなかった点も指摘された。だが、これらは本学位申請論文の価値を低めるものではない。

上記の通り、本学位申請論文は、愛知県立芸術大学の博士（音楽）の学位論文として価値あるものと認める。

最終試験結果の要旨

本学位申請者は作曲において「揺らぎを持った不均質な楽音をいかにして作り出すのか」そして「そのような素材をどう活かして、どう合奏するのか」という点に焦点をあてている。この点において、学位申請論文にて考察した「日本伝統音楽におけるヘテロフォニー」が申請者の作曲に有機的に反映される。とりわけ、学位申請リサイタルで初演された2本のソプラノ・サクソフオンのために書かれた《「鳴き」の合わせ方》は、本申請論文における研究の結果が見事に結実していた。最終試験において「木遣りの最大の特徴である『声』について、申請者自身が現場で感じ取った感覚や手触り感的なものを言及するまで至っていない」との指摘に対して、申請者自身が可視化できないところに日本の伝統音楽の「深み」や「味わい」があることに気付くことが出来たのは対象に真摯に向き合ってきた結果である。このように質疑応答についても的確な回答が出来ていた。

学位申請リサイタルで申請者自身が語ったように日本伝統音楽を考察する上では、「ず

れ」という現象にどうしても目が行きがちであるが、西洋芸術音楽とは異なる意味での、合奏における「合う」という状態を明らかにすることで、結果的にヘテロフォニーの本質的な部分を浮かび上がらせることに成功した。

このように学位申請論文と学位申請リサイタルにて発表された作品群の両面から、本研究は高く評価されるものである。

以上のことから、全員一致で優秀な成績での合格と判断したものである。